

『スタディ生理学・口腔生理学』第3版 正誤表

発生箇所	内容
P.23 L.4	誤：A抗原に反応するA抗体とB抗原に反応するB抗体がある。
	正：A抗原に反応する抗A抗体とB抗原に反応する抗B抗体がある。
P.23 L.9	誤：A型のヒトの赤血球表面にはA抗原があるが血漿にはB抗体が、
	正：A型のヒトの赤血球表面にはA抗原があるが血漿には抗B抗体が、
P.43 L.10	誤：潜在動脈
	正：浅在動脈
P.49 L.5	誤：機能的産器量
	正：機能的残器量
P.50 L.30	誤：ヘモグロビン (Hg) の酸素飽和度 (何%のHgがO ₂ と結合しているか)
	正：ヘモグロビン (Hb) の酸素飽和度 (何%のHbがO ₂ と結合しているか)
P.50 L.32	誤：Hgの酸素飽和度は97.5%、
	正：Hbの酸素飽和度は97.5%、
P.51 L.7~8	誤：Hgから解離するO ₂ 量が多くなり、
	正：Hbから解離するO ₂ 量が多くなり、
P.53 図9 キャプション	誤：抹消化学受容器
	正：末梢化学受容器
P.53 L.19	誤：中枢化学受容器のCO ₂ 上昇に対するは
	正：中枢化学受容器のCO ₂ 上昇に対する感度は
P.56 L.3	誤：b. 同じ酸素分圧でも血液温度が上昇するとHg酸素飽和度が増す。
	正：b. 同じ酸素分圧でも血液温度が上昇するとHb酸素飽和度が増す。
P.56 L.9	誤：b. 血液温度の上昇は酸素解離曲線を右にシフトさせるので、Hg酸素飽和度は低下する。
	正：b. 血液温度の上昇は酸素解離曲線を右にシフトさせるので、Hb酸素飽和度は低下する。
P.58 L.27	誤：胃液噴門部
	正：胃噴門部
P.65 L.9	誤：伸展受容器差刺激され
	正：伸展受容器が刺激され
P.76 L.21	誤：Na ⁺ の再吸収と促進する。
	正：Na ⁺ の再吸収を促進する。
P.82 L.5・11	誤：コルチソゾール / ルチゾール
	正：コルチゾール
P.87 L.31	誤：パラトルモン
	正：パラソルモン
P.89 L.8	誤：尿道が骨盤底のの
	正：尿道が骨盤底の
P.92 L.12	誤：尿道口 (尿道開口部)
	正：尿管口 (尿管開口部)
P.98 L.4	誤：遠心路：自律神経
	正：遠心路：体性神経 (運動神経)
P.103 L.3	誤：線条体〔尾状核 (caudate nucleus) と被殻 (putamen) 〕からなる
	正：線条体〔尾状核 (caudate nucleus) と被殻 (putamen) からなる〕
P.107 L.6	誤：顎二腹筋
	正：顎二腹筋後腹
P.112 L.10	誤：2点弁別閾体の
	正：2点弁別閾は
P.123 L.5	誤：高重量は加齢で減少
	正：脳重量は加齢で減少
P.127 L.22	誤：明所
	正：暗所

P.127 L.24	誤：3種の錐体で 正：3種の錐体の中で
P.128 L.6	誤：有能細胞数は現症は少ない。 正：有毛細胞数の減少は少ない。
P.155 L.20	誤：正解：b、c (95A-43、一部改変) 正：正解：c (95A-43、一部改変)
P.156 L.17	誤：正解：d (106A-321、類110A-1) 正：正解：d (類110A-1)
P.158 表1 上から3行目 左から5列目、6列目	誤：両側 (大きく開口)、両側 (ゆっくり少し開口) 正：両側 (ゆっくり少し開口)、両側 (大きく開口)
P.159 L.16	誤：(下顎張反射、歯根膜咬筋反射。口腔粘膜刺激による閉口反射) 正：(下顎張反射、歯根膜咬筋反射、口腔粘膜刺激による閉口反射)
P.159 図1	<p>誤：</p> <p>自己受容反射</p> <p>正：</p> <p>自己受容反射</p>
P.165 L.26	誤：d. 咬筋運動ニューロンは興奮始、 正：d. 咬筋運動ニューロンは興奮し、
P.169 図1 キャプション	誤：矢印は気流〔呼吸時〕および食塊〔嚥下字〕の流れを示す。 正：矢印は気流〔呼吸時〕および食塊〔嚥下時〕の流れを示す。
P.172 L.11	誤：舌咽神経の喉頭枝を電気刺激すると 正：舌咽神経の咽頭枝を電気刺激すると
P.187 L.20	誤：歯髄内に発声した 正：歯髄内に発生した

この度は『スタディ生理学・口腔生理学』第3版をご購入いただき、誠にありがとうございました。
以上の箇所に関して誤りがございましたので、ここに訂正するとともに深くお詫び申し上げます。

2021年3月